

● 本会の動き ●

☆「第3回上席化学工学技士交流会」に参加して☆

去る7月14日大阪科学技術センターにて、第3回上席化学工学技士交流会を開催致しました。会を重ねる毎に参加者は増え、今回も関東・東海・関西・中国地区から16名の方が参加され、活発な意見交換ができ有意義な時間を過ごせました。

交流会は、製品・技術講演／フォーラム／懇親会の3部構成になっており、今回は大学と化学企業の連携による省エネ推進の事例として「改良型ペトリュク蒸留プロセスの開発とその実証」を(株)ダイセル亀井登氏から、「水処理プロセスおよび化成品プロセスへの膜分離技術の適用について」を呉工業高等専門学校 高田一貴教授から講演頂き、またフォーラムとして「若手の育成／なぜ彼等は的確な解にたどり着かないのか」という趣旨で企業における若手育成の現状と抱えている悩み、そしてその若手の基盤を構築する教育機関としての大学・高専のあり方をざっくばらんに議論致しました。

参加頂いた技士の多くが、化学製造関連の開発・生産技術・製造のグループリーダーとして新たな技術開発や新規製品を市場に出すことを任とされ、また同時に、次世代技術者育成の責務も抱え、常に問題意識を持っておられる方々ですので、講演やフォーラムの議論も単なる形式的な質疑応答ではなく、実際の現場経験を踏まえた突っ込んだものとなり、司会である私としては「時間が…」との悩みと白熱した議論との板挟みになりつつも「この続きは懇親会で」という切り札を出しつつ、なんとか時間内に収めることができました。

フォーラムでは「若手の育成／なぜ彼等は的確な解にたどり着かないのか」という各自入社当時の若かりし時の反省も踏まえての議論がなされました。昨今のデータ処理能力の圧倒的な向上と、各社事業領域の拡大も加わり、その結果、担当者を取り扱う情報量は膨大となるも、結果を出す時間は益々短縮を要求され、それ故



どうしても細目部分をBlack Box化して鵜呑みにする、またそれを助長する「中身を知らなくともToolを使いこなすことが是認された風潮」にも問題の一端はあるのではないかと、との意見がありました。その風潮を前提として化学工学を目指す若者にどのような教育をしていくのか、その点を今の大学の教育システムで対処できるのか、より若年層からの工学教育に着手している高専の方がこの課題に対して適切に対処できる可能性が高いのではないかと、等々の貴重な議論がなされました。

司会という立場で、参加された方々のご意見を拝聴して感じたこととして、皆様が人材育成について日々真剣に悩み・精進されている姿を見ると、やはり日本の化学技術者も捨てたモンじゃないと強く感じると共に、これらの諸問題を単に個人で対処するのではなく、技士や学会としてより高度なサポートができるスキームに作り込んでいくことが、今後の私達の使命のひとつではないかと感じた次第です。

フォーラムの演題として「化学工学技士制度をどう活かしていくか、強い武器となりうるか」というものも用意しておりましたが、それまでの議論が白熱し時間が取れず、次回のフォーラムでの議論となりました。次回も技術講演とフォーラム、そして懇親会の3本立てで11月11日(水)午後開催を計画しております。引き続き、上席化学工学技士間の交流会を深め・発展させていきたいと考えており、次回も多数の方々のご参加をお待ちします。

(宇部興産(株) 森下啓之)